

インド・釈尊あれこれ紀行



サラスヴァティ、琵琶を弾く弁財天。日本では芸事の神様とされる



マハーカーラ、怖い顔をしている大黒天。日本では七福神のひとつ

日本に渡来した ヒンドウー教の 神様

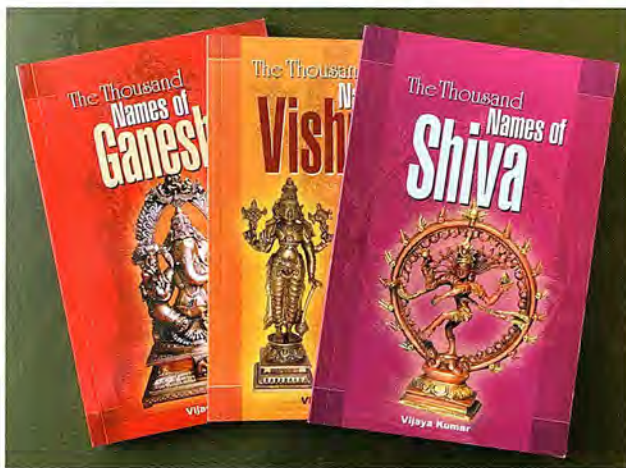
インドの人々の70パーセントが信ずるヒンドウー教だが、いつごろ生まれたのかわからず、開祖、経典、宗派がなく、この点では神道に少し似ている。仏教、ジャイナ教、イスラム教には開祖もいるし経典もあるが、イスラム教には僧侶はおらず、経典解釈をするイマーム（指導者）がいる。前回、ガヤのヒンドウー教寺院の中に他教の寺院もあると述べたが、まさにヒンドウー教ならではの。

ヒンドウー教の神々は無数に存在する。よく知られるのはシバ神、ビシュヌ神、そしてガネーシャ神だが、これらの神にはそれぞれに1,000種類を超える名前があり、そして、それらの名前を事細かに記す辞書まである。ただし、「すべての神々は実は一つである」と説かれているのが面白い。

このヒンドウー教の神々で、日本に伝えられたのは、密教（真言宗、天台宗）で仏様の守護神とされる神々を中心である。

インド渡航歴40回超!

佐藤良純のインド・釈尊あれこれ紀行 No.7



インドでは同じ神ながら、なんとその呼び名が1000を超える。
左の写真はインドで買い求めた神の呼び名を記した本で、左からシバ神、ビシュヌ神、ガネーシャ神。前号でも紹介した破壊の神・シバと、物事を維持する神・ビシュヌはどちらも最高神。
象の顔をしているガネーシャは富の神様で、聖天と呼ばれ、インドで最も好かれている神だ

1. Vishwam: *The All*

Lord Vishnu is the Universe, the supreme Brahman.

ॐ विश्वमे नमः

2. Vishnu: *The All-pervading*

Lord Vishnu pervades the whole universe, externally and internally.

ॐ विष्णवे नमः

which is Absolute Bliss.

1007. Shrivardhana: *The Nourisher Of The Vedas*

Lord Shiva, the Author of the Vedas, bestows spiritual wealth on His devotees.

ॐ श्रीवर्धनाय नमः

1008. Jagat: *The Entire Cosmos*

He is the Entire cosmos enveloping and pervading all.

ॐ जगते नमः

ビシュヌ神の本には、びったり1000の名前が記してある。写真は1ページ目

この本にはシバ神の呼び名が、なんと1008種類も記されている

梵天（ブラフマー神、創造の神）は多くの顔を持つ神として描かれる。日蓮宗の池上本門寺のお会式を飾る多くの切れ目のある梵天様をかかげる祭りはこの神を表している。

帝釈天（インドラ神、雷神）は、東京柴又の帝釈天、映画『男はつらいよ』の舞台となる経題寺の仏で、寅さんとともに名前が知られたっている。

水天（ヴァルナ神）は日本では安産の神（水天宮）として信仰されている。胎児が母の体内で羊水に囲まれていることに由来する。

弁天（サラスヴァティ、弁財天、琵琶を持つ）は、パキスタンの砂漠の地下に流れる伏流水で、インド洋に流れ込んでいるサラスヴァティ川の化身とされる。日本の弁天様は神奈川県江の島が有名である。

ガネーシャ神は智慧の神で、インドで学問や芸能で身を立てることを志すと、日本と同様に6歳頃にこの神に成功を祈る。また、子供が学ぶ教科書や本は、必ず「ナム ガネー

インドラ、帝釈天のこと。日本でもよく知られた神のひとりで雷神である



ラクシュミー、吉祥天で美、富、豊穡、幸運を司る神で人気のある神のひとり



ガネーシャ、象の姿をした二神の聖天が抱き合っているのが日本では一般的



「シャヤーアーム」の言葉で始まっている。「智恵の神に導かれますように」といったところだ。その姿は象だが、日本では二神が抱き合う形で表される。この聖天（歓喜天）は東京浅草の待乳山聖天がよく知られているが、水商売の人々に信仰されている。

ヤマ天は、閻魔王（もとは天に住む双子で、人類で最初に死んだ人。そのため地下に住むとされる）として人間の死後、生前の行いで極楽浄土に生まれるか、地獄に落ちるかを決める神として恐れられている。

鬼子母神（ハリイテイ）は子供の守り神であるが、その夫の般闍迦（パーンチカ）はあまり知られていない。日本では「恐れ入谷の鬼子母神」と故事諺にもなっている。

奏楽神であるガンダルヴァ神は烏トンビに似た姿で、神奈川県箱根の大雄山最乗寺の道了尊（天狗）が有名である。

毘沙門天（クベーラ神）は船乗り信仰される地方もある。東京神楽坂の毘沙門天が有

チトラグプタ、閻魔専属の書記係。手に持つ紙に罪を記録している



クペーラ、毘沙門天で富と財宝の神。日本では四天王の一人となっている



ガルダ、神の鳥。仏を背負って三世（現在、過去、未来）、宇宙、世界を飛ぶ



名である。

チャンデイ神は天然痘を人々の代わりに発症し人々の苦しみを無くす神として、体中、天然痘の発生を示す痘痕としてアバタだけの姿で表されている。遠藤周作のインドのヴェナレスを舞台にした小説、『深い河』の題材にもなっている。

不動明王（アチャラナート）は動かない者の意味で、二人の従者を従えている。

吉祥天（ラクシユミー）も日本では有名な。ある。

こうしてみると、日本各地にいくに多くのヒンドゥー教の神々が祀られていることか。

佐藤良純

大正大学名誉教授

さとうりょうじゅん 昭和7年東京生まれ。大正大学、同大学院、インドテリー大学院に学ぶ。昭和34年より大正大学で教鞭をとり、教授、学部長を経て、平成14年退職、大正大学名誉教授となる。インドへの初渡航は昭和38年、以来インドへ訪れること、40有餘回。著書に「ブッダガヤ大菩提寺」、「釈尊の生涯」など多数。